

櫻井 彩  
(さくらい あや)

千葉工業大学  
工学部  
建築都市環境学科



現在日本ではひとり親世帯の割合が増えてきている。そんなひとり親世帯にとって今の1住宅=1家族という形が定着したためできたプライバシーとセキュリティによって守られ周りとの関係を絶ってしまう住まい方は適切なのか。

過剰なセキュリティによって守られた住宅ではなく、周りに関わりを持って暮らしていくことで守られる暮らしを提案する。ひとり親世帯同士の同じ境遇を持った家族が互いに協力して暮らしていくことのできるシェアハウスと公共施設(保育園、児童館、図書館)の公共性を生かし、もっと暮らしと一体化させる。

シェアハウス内のひとり親世帯同士はもちろん公共施設利用する地域の人たちとも関係を強めていく。

この建築の中にはいつもいっぱいの人たちに利用されコミュニティの場である公共施設は今まで以上に活発に機能する。

ここは小さな家族の大きな家。



講評

すでに世間に定着してしまった「シェアハウス」という造語から、私たちはつい、特定のライフスタイル、たとえば地縁血縁的社会規範に抗う個人主義的居住様式などを想像してしまう。だが本作は、既知のシェアハウス像と趣が異なっており、読解に注意が必要である。共同体意識を高めることで住民結束をはかるという方策は、既存住宅地一般に実施されてきた極めて“伝統的”な自治手法であるし、地域の治安維持を近隣同士の共助関係に期待するという態度も、明らかに前近代的・保守的な公共思想に即しているともてよい。この手の傾向をもつ公共空間には、概して閉塞感がまわりつくものだが、本作にそれが無いのは清々しい。おそらく、動線・ゾーニング計画にあたって、集約的・合理的に処理しなかったことが幸いしたのだろう。加えて、居住空間や児童館はとくに開放的であるが、単にオープンだけでなく、住民同士が多様な位置関係から視線や声をやりとりできるよう、微妙な空間境界が施されているのは興味深い。

さて、このコミュニティで育つ子どもは、どのような人格を形成するのだろうか。欲を言えば、作者の理想とする教育観を、設計の中に明確に表現するべきだったと思う。  
(審査委員: 矢野 裕之)